社 会 科

1.「世界史必修」と高校社会科の問題点

都 築　　亨

Ⅰ．はじめに

昨年（昭和62年）11月教育課程審議会高校分科会（分科会長　諸沢正道国立科学博物館長）はそれまでの審議の流れを変え，突然高校の「社会科」を廃止して昭和69年度から「地歴科」と「公民科」に二分することを決定し，世論にかなり大きな反響をよんだ。

戦後40年続いてきた社会科が高等学校の教育課程から消滅することになったのである。そして，それとともにその「地歴科」と「公民科」の中で「世界史」は唯一の必修科目とされることになった。高校社会科の分割と世界史の必修とをセットとして俎上にのせることについてはかなりの政治的な作為を感ずるものであるが，「世界史必修」というその点については，実は本校でもこの数年来，本校独自のカリキュラムで実施し，その結果については研究紀要に報告したことでもあり※(1)そのことについて，特に異を唱えようとは思わない。

しかし，その中でも指摘したように，共通一次が施行されて，その中での難易度のアンバランスが問題点とされてきたそのころから高校生の「世界史ばなれ」が大きく問題になっていた高校教育の現状で，無理やり必修を進めることはかえって高校生諸君の「世界史ぎらい」の傾向を助長し，学習意欲の減退をもたらすことにもなりかねないのではないか。一方で大学入試方法の改正で，社会科の受験科目が制限され，理系の生徒諸君にとって「社会科は必要でない」とさえいうようにもうけ取られかねない一般的状況があったはずである。

そうした中で「世界史必修」が強制されたとき，どういうことになるのだろうか。「世界史的視野」をひろげることが今後の日本人に要請されていることは確かであるとしても，そこからすぐ短絡して「世界史」を直ちに「必修」にしてよいかどうか慎重に考えなければならない問題点である。したがって教育課程審議会の路線で「世界史」必修が打ち出された今，ここで，現在まで試みに行ってきた本校の「世界史必修」の実施状況から推論できることをまとめて今後の論議の素材にしていただければと思う。

Ⅱ．本校における「世界史必修」の現状

本校では「世界史」を数年前から必修として２～３年で学習させている。それは前掲の研究紀要でも指摘したように，中学校の社会科で「歴史的分野」から世界史の内容が圧縮され，以前よりも「日本史中心」に移行してきている現状の中で，せめて高校では「世界史」を履修せず卒業してゆく様なことはなくしたい。そして世界に視野をひろげてものが考えられるようにしたい。今後日本がますます世界にその活動の舞台を広げてゆくことが予想されるのに，全体としての世界の歴史的背景を全く知らず，また異文化の理解についてその基礎的素養を全く持つことが出来ない日本人が多くなるということは，どうみても好ましいこととは思えない，ということであった。

そして実際に「世界史」を全員に必修科目として履修させるには現在の「世界史」はあまりにも内容が多く，複雑多岐であり，全員に課するためには，何よりもその内容を生徒の歴史的意識の実情に適合するように「変えて」いかなければならないだろうということであった。

その対策の一つとして「五世紀以降の世界史」を必修としたらどうかということも考えてみた。（研究紀要第29集）できれば13世紀以降でもよいが，いろいろな現実的問題を考慮に入れると，日本の古代史が始まり，アジア大陸でも北方からの遊牧民族の華北侵入が始まり，また西アジア・アラビアが大きく歴史的な変動期にあたり，そしてまたヨーロッパでもゲルマン民族の活躍――ヨーロッパ世界の成立――が見られた５ないし６世紀から「世界史」を学ぶことはかなり妥当性を持つものではないかということであった。

結果は必ずしも妥当であったとは言えない。「倫理」や「政経」でギリシアやローマの政治・思想が多く出てくるのにその歴史的背景を生徒たちが全くつかんでいなかったり，唐突に「５世紀」が出てくることが，当然「歴史は昔からずーと学習をするものだと思っている」生徒諸君にとって素直に受け入れられない面が多かったと思う。そして特にあまり歴史が好きでない生徒に対してより複雑な印象を与えてしまったようである。そしてそうした工夫によってすらも，世界史の

膨大な内容を「軽くする」ことはできなかった。

昨年度はまた原始古代から「世界史」を「系統的に」学習させることにしてしまったが，それは問題を振り出しにもどそうとしたというわけでもなかった。出来れば日本史との関連の中で必修の「歴史」の内容と方法とを構想したいというねらいをもってのことであった。昨年の「世界史必修」について考慮を加えた点は次のような点である。

① 理系進学希望者や進学しない生徒たちにとってこそ「世界史」は必要なのではないか。そしてそうした生徒達に必要な世界史の内容というのはいったいどのような内容かをはっきりさせたい。

② どこから「世界史」を始めるのか。なるべく原始・古代を簡略にして，現代史まで学習させるにはその「始まり」をどこに持ってくるべきだろうか。

③ 同時に並行して学習（選択）している日本史との関連をどのようにつけたらよいか。

④ 資料を使うとすれば限られた時間で，最小限どの程度のものが必要か。

⑤ どこを省略するか。……などなどである

反省点としてはいくつかある。

(1) どこを省略するか。結局軽く扱うことになったのは西アジア，アフリカ，アメリカ大陸の諸民族の歴史であり，西洋中心史観を克服して新しい世界史を考えねばならないという本来の意図に対して，それとは逆行したものになってしまった感がある。

(2) 古代を簡略化したいと当初はかなり強く意識しながら，「古代文明」から始めて，気がついてみたら結構古代史に没入して，1学期をほとんどこれにあてることになってしまった。多分これでは3年になって，週2時間で現代までは進めないのではないか。

(3) 資料を使いたい場面はかなりあるが，そこでいろいろと指摘したり，考えさせたりしていると，結局時間切れとなり，進度がますます気になる。

(4) 何が「必修世界史」のポイントなのか，ミニマムエッセンシャルズなどという観点でこの問題に直面すると，項目的な羅列になるか，あるいは時代や文化圏の「キーワード」をつなげるだけで本当の歴史のダイナミズムにふれられない，したがって生徒諸君の世界史に対する興味・関心からますます遠いものになりかねない。

Ⅲ．いま一度「世界史必修」の構想を

2年ばかり続けて「世界史必修」の内容を古代史を省略するという形にしてすすめ，昨年度は再び「古代から」学習をしてみて，その結果「世界史必修」は無理なのではないかと諦めかけていた。折りもおりそんな所へ教育課程審議会の「世界史」必修案が公表されて，どうにも引くに引けない所にまで来ている。無理なのではないかと考えたのは「世界史必修」を意識して，どのような進路の生徒にも必修な「世界史」の内容を考えてみた場合，それを一つにまとめることはかなり難しいということである。そして，3年生の2学期後半から受験に無関係な科目に手を抜く生徒たちが目についてくると「世界史必修」は教師にとって他のどの科目よりも重荷になってくる。

また〝アジア・アフリカに視点をおいた世界史〟を組み立てるということと，〝世界史の内容を思いきってカットする〟ことと，その二つの要請を十分に充たすのは難しい。

理系の進学希望者や進学をしない生徒も興味・関心を引きつけるような内容構成は，「世界史」を受験科目にしている生徒からはかなり不評である。

もしそれでも「世界史必修」は考えるべき命題だとしたら，次のどれかであろう。

① 「現代社会」に代わって必修させる意図を含めて、思い切って「現代史」に重点をおいた「世界史必修」のプランを基本的図面とする。できれば「日本史A」と統合して「近現代史」とする。

② 「世界史必修」とは別に、受験向けの「世界史」を別に選択させる。（補習的に）

③ 「世界史」を必修にはするが，「世界史A」（近現代史を中心とする）「世界史B」（現行の「世界史」の趣旨を踏まえ，世界の歴史の大きな枠組みや流れを理解せ，文化の複合性や多様性を）にとどまらず，さらに4単位の「C」「D」の中から選択させる。

今年中にこの案をすべて試行してみることは出来ないが，いままでに選択必修させるという前提でいくつか考案してみたのは次の各プランである。

〔世界史　A〕「十三世紀以降の世界史」プラン

数年前に，あまり受験を意識せずに一応まとまりのある「世界史」を構想し，途中で方向転換をせざるを得なかったプランは次のようなものであった。もし，「世界史A」としてならば，近現代史プランを最大限のひろがりを持ったものとして考慮の対象になる。

序　古代・中世の文明の起こり

① 13世紀のユーラシア大陸
　—マルコ・ポーロの時代—

② 東アジア世界とヨーロッパの近代
　—中華帝国の成立と大航海時代のヨーロッパ—

③ 絶対主義国家の世界市場，植民地戦争
　—スペイン，イギリス，フランスとアジア—

④ 産業革命と市民革命

—名誉革命，フランス革命，産業革命—
⑤ 19世紀の世界
—ウィーン体制の崩壊と自由主義—
⑥ 帝国主義の世界
—アジア・アフリカの動向とヨーロッパの進出—
⑦ 第一次世界大戦
（以下略）

〔近現代史〕「日本史を含む世界史」
「世界史」は結局のところ現代史である。それを現代日本の立場に立って見た「世界史」として「日本史A」の内容をも取り込んだ案として策定できないだろうか。
教育課程審義会の案によれば「日本史A」は「現代日本の形成過程を世界史的視野に立って理解させ，特に我が国の近・現代の歴史を我が国を取り巻く国際関係などと関連づけて」という内容であれば，「日本史A」「世界史A」を内容的に一つにまとめることも可能であろう。

序 現代世界の成り立ち
① 近代以前の日本・東洋と西洋
② 開国前・江戸時代の日本への「欧米」の接近
③ 19世紀・産業革命以後のヨーロッパの発展
④ アメリカ合衆国の発展と南北戦争
⑤ ドイツ・イタリアの統一とイギリスの繁栄
⑥ 開国から討幕へ
⑦ 明治新政府の成立と富国強兵政策
⑧ 自由民権運動と帝国憲法
⑨ 日本の産業革命と日清戦争
⑩ 東方問題とトルコ，ロシア，ベルリン会議
⑪ 帝国主義の成立，日露戦争
⑫ 第一次世界大戦と日本
⑬ 大正デモクラシー
⑭ 国際協調の時代と日本
⑮ ファシズムと第二次世界大戦
（以下略）

〔世界史 B〕「5世紀以降の世界史必修」プラン
かつて実施してみた「世界史」短縮案であるが，とりあえず，「世界史B」の構成を考える場合の下敷きとして，まとめておきたい。

序章として5世紀以前の「世界史」
① 5～6世紀のユーラシア大陸
—民族の大移動と農耕・遊牧社会の形成—
② 東アジアにおける北方民族の華北侵入
—五胡十六国と南北朝時代—
③ 隋唐帝国の成立とアジア
—東アジア律令制国家の発展—
④ イスラム世界の成立
—イスラム教のひろがりと科学文明—
⑤ ゲルマン国家の成立とキリスト教世界
—フランク王国と東ローマ帝国を中心に—
⑥ 十字軍とモンゴル民族のユーラシア支配
—12～13世紀における三文化圏の関連—
⑦ 近代ヨーロッパの成立
—大航海時代とルネサンス，宗教改革—
⑧ 絶対王政と宗教戦争，植民地戦争
—バロックとロココの時代—
⑨ アジア的専制国家
—明・清，オスマン・トルコ，ムガール帝国—
⑩ 産業革命と市民革命
（以下略）

「世界史 C」 文化圏学習を中心に
現行の「世界史」はほぼ想定

Ⅳ.「世界史」必修の問題点

いま進学率が94％をこえ，かつ中学校で世界についての歴史をほとんど表面的にしか学習してこなかった高校生達に対して，どのような形にせよ「世界史」を必修にしたいという教育課程審議会の案に対して，国際化の時代として現在の日本を意識する限り，特に反対するという理由はないであろう。今ほど世界認識が必要な時代はなく，異文化の理解についても，特殊日本的な状況が支配的な今の日本の社会ではやはり要求されて然るべき視点であろう。
しかし，すべての高校生に対して同じ内容と，同一の展望をもつ「世界史」を学習させねばならない必然性はない。「世界史A」と「世界史B」の2コース程度では不十分である。また「世界史」を学習したから即国際化に対応出来るとも限らない。「たしかに世界各国の歴史をよく知っていることは貴重である。しかし，世界史で高い得点をとれば，国際化に対応できるのであろうかと反問せざるを得ない。入試を筆頭に日本の学校での試験は客観テストが主流である。事件・人名・年号をより多く記憶することが，この客観テストに高得点を得るのに有利である。特定の国の特定のできごとを詳細に知っていても，それは試験の結果に反映されない。それに世界史に強いことだけが，外国人と会話を楽しむことを可能にする条件とは限らない。」*(2)まして「世界史」を受験科目としか意識して考えない生徒の要望する「世界史」の内容を一般の生

徒にまで課することもないであろう。

昭和35年度の学習指導要領の改訂で「世界史A」と「世界史B」とが示され，一方は普通科に，他方は職業科にと考えられていたが，その当時の高校進学者は51.5％（30年）から57.5％（35年）に上昇した折りであり，就職者の比率は61.3％に上っていた。今や高校進学率は93％を越え，しかも普通科がほとんどであるが，にもかかわらず，その意識は35年当時と比べて比較にならないほどに多様である。

大学での学問研究の前提として「世界史」的教養が必須であるという意見もあるが，それは高校教育に対する理解をほとんど欠いた要望である。全員が大学に進学しているわけでもない。

とすれば，「現代社会」に替えて高校生すべてに同一内容の「世界史」を履修させるよりも，いくつかの「世界史」の中のどれかを学習させることによってそれぞれの興味関心と進路に適応した「世界史」を学ばせたいと思う。そうでもしない限り，高校生の「世界史ばなれ」をくいとめることは出来ても，「世界史嫌い」をより助長することになるであろう。

V．高校の社会科解体論について

上述してきたのは「世界史」を必修にしたいという教育課程審議会の案に必ずしも反対ではないが，現実的には選択必修として「世界史A」「世界史B」のみでなく選択の幅をひろげ，場合によれば「世界史A」も取り込んだ「近現代史」にした方がよいであろうという結論であるが，同時に示された「地歴科」と「公民科」に分割するという方向については反対である。

多くの人から指摘されているように（そしてそれが社会科解体論の根拠とされている面もあるが）今までも高校の社会科は「社会科」としての「教科」の意識はあまり感ぜられず，「科目」のみ存在していたというのは私の実感でもあるが，「いつ解体されてもおかしくないぐらいに，我が国の社会科が寄木細工的であったことの表れと受けとるべき」*(3)かもしれない。しかしそれでも高校社会科は生徒たちの社会認識の形成に関して共通のベースを持っていたし，社会科の教師は「日本史」であれ，「世界史」であれ，また「政治・経済」であれ，指導出来るし，しなければならぬという枠組みを免許状の上でも持っていた。それは幅広い社会認識を教師が持つという点では極めて有効であった。幅広い社会認識を期待されるという点では生徒も教師も同一であろう。「教員養成・教員免許の面から考えると，歴史の教師はやはり歴史をしっかり勉強してきた人であってほしい，社会科を分離することによって教師の専門性が高まることが期待できます」*(4)という意図もある。もし，今後免許状の上においても「地歴科」と「公民科」に分けられて「世界史」の教師に「倫理」や「政治」についての教養がそれほど求められないとすれば，視野が狭くこそなれ，広くなることを期待することは難しいであろう。

『教育』の2月増刊号で，高嶋伸欣氏は「社会科の専門的分化を強調するばかりで，高校生が社会的事象の個別的認識の段階から，因果関係を軸に空間・時間・社会階層など多様な側面から社会の構造を把握する力量を身につけ，事象の社会的意味を〝考え〟て認識することに強い関心を示す段階に進みつつある」*(5)という認識が解体推進派に欠落していることを指摘しているが，『現代社会』が設置された趣旨もその方向を期待したからにほかならず，今回の改訂でも文部省自身，「現代社会」を降ろしてはいない。

現在の日本において求められるべき社会認識は，国際社会にも通用出来る認識であり幅広い世界認識である。それが「世界史」必修を支持できる視点である。もしそうだとしたら，「地歴科」と「公民科」を分離して社会認識の枠を狭めるというのは明らかに逆行である。むしろその双方を統合する視点を求めるという作業こそが，教育課程審議会に要望される所である。「歴史の学習でも地理の学習でもまた政治や経済の学習でも国際化や成熟化への対応を核として内容を統合していくことが今日的課題である。」*(6)という指摘は傾聴に値するし，国際化のみでなく，情報化，産業化の波に対応できるようにするためには，情報処理の能力を育成する緊急の必要もあり，「地歴科」「公民科」の枠をはめては，その情報が限定されこそすれ，広がることは期待できないであろう。

せっかく広い社会認識を求めようとした「現代社会」の意図を全くつぶしてしまっては，文部省自身〝朝令暮改〟のそしりを免れないであろう。そして開かれた社会認識の形成とは「公民科」の中に「現代社会」を吸収してしまうことではないはずである。もし，ゆずって「地歴科」と何かに二分する必要に迫られているならば「現代社会」を取り込んだ「社会科」とするのが素直であろう。そうすれば今批判をうけているような「社会科つぶし」の汚名だけは免れて，一部の委員のめざされる二教科分離の実が達成されるはずである。「世界有数の経済力を背景にしたこの国際社会での日本及び日本人が期待どおりの役割を果たすには，従来の社会科の『公民的資質』を養うだけでは十分でないと考え，新しい国際化社会に生きる日本人としての資質を養うために，社会科を充実発展させるべく『公民科』と『地歴科』に再編成したのである」*(7)などと苦しい言いわけをしなくともすむというものである。「従来の社会科の目標である『民主的・平和的な国家社会の形成者として必要な公民的資質』の養成は新しく誕

生する『公民科』の主たる目標として位置づけられている」としたらなおさらのことである。

「地歴科」「公民科」に二分しないでゆけないかと私は希望したいのであるが，もし，多様化に対応してどうしても2単位と4単位の二本立ての単位構成が必要ならば，便宜的に社会科を二つに…線で区分することも考えてよいかも知れない。私案によれば高校社会科の枠組みは次のようなものになる。

現行の社会科		改正私案	
現代社会	4	日本史A	2
日本史	4	日本史B	4
世界史	4	世界史A(近現代史)	2
地理	4	世界史B	4
倫理	2	世界史C	4
政治・経済	2	地理A	2
		地理B	4
		現代社会	4
		倫理	2
		政治・経済	2
		公民に関するその他の科目	

上の枠から「世界史A」「〃B」「〃C」を含めて，2科目4単位以上，下の枠から4単位以上必修ということでよいはずである。

「民主的・平和的な国家・社会の有為な形成者として必要な資質を養うとともに，急速な国際化の進展を踏まえ国際社会に生きる主体性のある日本人を育成するという新しい時代の要請に応える」という視点が高校の教育課程改定の原点とされ，「国際化対応の学：世界史というイメージづくり」*(8)がなされているというが，「国際化」という「錦の御旗」の内容について，その意味内容の吟味が十分になされないままに「世界史」必修，さらには「社会科」解体，戦後総決算と進められる「改訂」の急き立てられ方に危惧の念を感ずるのである。

(1)都築　亨「高校生の歴史意識と必修世界史の構成」名古屋大学教育学部附属中・高等学校研究紀要28集
(2)岩内亮一「国際化の基本は何か」『月刊高校教育』1988，1　54ページ
(3)小西正雄「岐路に立つ総合社会科・論議の焦点は何か」『社会科教育』2月号（No307）13ページ
(4)高石邦男（文部省事務次官）「教育改革と高校教育」『月刊高校教育』1988，1　新春対談の発言
(5)高嶋伸欣「社会科解体と社会認識の教育」『教育』1988，2　62ページ
(6)大野太郎「新しい〝総合の核〟を検討する時機」『社会科教育』2月号（No307）44ページ
(7)田村哲夫「社会科の変貌－なぜ世界史必修か－」『月刊高校教育』1988，2　23ページ
(8)芳賀　登「いま，なぜ歴史教育の独立なのか」『高校教育展望』1988，1　50ページ